

大項目 8. 図書館および図書・電子媒体等

(目標)

学生の主体的学習の促進を図るために、適切な規模の図書館を配備し、質・量ともに十分な水準の学術情報資料を系統的に集積し、その充実に配慮するとともに、効果的な利用を促進するために必要な措置を講ずる。学生閲覧室の座席数について、収容定員の10%以上を確保する。

また、学術研究の高度化、国際化、多様化に対応して、電子図書館の開設も視野に入れ、データベースの構築に努める。

(図書、図書館の整備)

A群 図書、学術雑誌、視聴覚資料、その他教育研究上必要な資料の体系的整備とその量的整備の適切性

[現状把握]

①資料の収集・受入れ

・図書

本学美術資料図書館の蔵書は約240,000冊であり、このうち7割は美術・デザイン系の専門分野に特化した蔵書であって、わが国の美術系大学においては質量ともに最高水準を維持している。年間の受入れ、購入総数は和書洋書合わせて平均4,000冊前後である。開架図書は平成11年度より年度計画に従って予算措置を行い、規模・質量の強化を図ることを進めており、現在24,000冊になっている。

通常、図書資料入手のための情報源は『週刊新刊全点案内』『図書新聞』『週刊読書人』などの出版情報誌や出版社案内目録などを用い、また美術・デザインに関する専門分野の出版物から図書館の管理職を中心としたスタッフが情報の把握を行っている。加えて情報が得にくい美術・デザイン関連の洋書については特定書店、業者の協力を得て見計らいにより選択している。

ただし、アメリカの大学出版局（略称UPI）の学術図書やアメリカ・ヨーロッパを中心とした世界的な美術館より出版される展覧会図録や図書に関しては自動的に納品されるシステムができあがっている。

カリキュラムに対応する図書はシラバスの情報をもとにしている。ただし、一般図書資料については選定基準の明文化されたものはなく本学の伝統と学科構成およびその専門性を鑑みて図書館長より権限委譲を受けた図書館管理職が中心となり収集・選定を行い原則として業者への注文によって納品されている。

また本学の特色ある財産であり文化遺産とも言える専門領域の図書資料については、資料の蓄積を継承し体系的かつ系統的な収集を心掛け、購入にあたってはその分野の教員から助言と推薦を受けるようにしており、一般古書の資料情報は古書目録の他専門古書店の

図書館および図書・電子媒体等

見計らいによっている。一般古書や貴重古書の購入選定については「国立国会図書館貴重書指定基準」「国立国会図書館準貴重書等指定基準」を準用しながら選定を行っているが、先の国立国会図書館の事例を参照し、館長を中心とした館内の選定会議で決定している。

ただし1点の価格が1,000,000円を超える貴重書古書等については原義書を上げ、関係事務所管および学長、理事長の決済を仰ぐほか、特殊なコレクション等については運営委員会での審議を加えて対応している。

利用者からの資料購入希望については、館内の選定で受け入れの可否を決めているが、現在のところその多くは希望に沿う購入が実現している。受け入れが決定した資料は月末に支払い行為を完了し、受入れ財産登録を行い、同時並行して書誌データの作成を行う。資料の納品よりおよそ1ヶ月以内には新着図書は公開検索ができるような仕組みとなっている。

・学術雑誌

本学美術資料図書館の定期刊行物（逐次刊行物）は一般雑誌、学術雑誌、官公庁誌、団体・協会誌、同人雑誌、企業雑誌などでその総数は約4,100種である。その内訳は国内定期刊行物が約3,240種、外国定期刊行物が約860種となっている。そのうち特にエディトリアル・デザインの視点から収集している企業PR誌は一般的には入手が困難なものを含んでおり約300種を数える。また、本学の専門領域に関する定期刊行物は一般雑誌と異なり入手ルートが限られており、とりわけ洋雑誌については欠号を生じないよう継続的に収集することがなかなか難しい。そのために特定の業者へ発注依頼し、自動的かつ継続的に納品されるような仕組みを築いている。

・視聴覚資料

本学では映像学科が母体となっている「イメージ・ライブラリー」において視聴覚資料を収集し利用提供しており、邦画、洋画等映画を主題とした視聴覚資料約6,300点を所蔵している。一方、図書館内には伝統芸能・美術史・現代美術・デザイン・建築関連等の視聴覚資料約2,400点を所蔵しているが、近年の図書・雑誌・参考資料などはデジタルメディアとして出版されるものが増加しており、利用状況を加味しながらデジタルメディアで出版された資料の収集も行っている。しかし、当館においてはスペース上の困難さから視聴覚ブースが1箇所設置されているだけであるが、「イメージ・ライブラリー」において34席が確保されている。

・その他教育研究上必要な資料

教育研究上必要な資料として、図書メディアでは貴重書コレクションを、図書メディア以外の資料では美術資料コレクション、民俗資料コレクションを有する。

貴重書コレクションは、教員の研究目的においてのみならず、授業においても学生が直接に触れることのできる仕組みとなっている。これは本学の教育の伝統である「本物に触れる」という観点からの教育的措置である。それらの貴重書は量的、質的にも専門図書館としてふさわしい体系的なコレクションとなるよう考慮し、年度計画により予算措置を行い収集している。現状の整備状況は、本学の創立者のメンバーでもあった故金原省吾氏、故

服部有恒氏の蔵書の寄贈を受け 1958 年に創設された日本美術史、東洋美術史関係資料「金原・服部文庫」約 10,000 点を始めに、室町時代後期から江戸時代初期の制作と推定される写本「奈良絵本」や 16 世紀初期のコメニウスの「世界図会」や「イソップ寓話集」などの欧米の初期挿絵本に始まる内外の「絵本コレクション」5,000 点以上を所蔵し、またグーテンベルク印行「42 行聖書」のファクシミリ版、写本やレオナルド・ダ・ヴィンチの手稿本類のファクシミリ版 15 点、近代デザイン史分野の研究資料群である雑誌『PAN』『Wendingen』『The Studio』『Jugend』『The Illustrated London News』など 19 世紀末関連の貴重雑誌群 50 点、さらにタイポグラフィ関連資料「エル・リツキー・コレクション」が約 200 点、「アーティスト・ブックス・コレクション」約 200 点など、本学独自の特色ある研究資料群がある。また、準貴重書に位置づけられている 19 世紀以降の国内外の展覧会図録約 60,000 冊を所蔵しており、本学の専門性と教育研究的見地から体系的整備がなされている。

なお、本学美術資料図書館には、図書メディア以外の特有なコレクションとして、美術・デザインの領域と、生活造形を中心とする民俗資料コレクションというモノ資料を収集している。

具体的には美術資料コレクション約 26,000 点、民俗資料コレクション約 90,000 点である。美術資料コレクションの所蔵分野は次の通りである。美術分野に属する作品では日本画（軸物、絵巻複製）、油絵、彫刻、版画等 1,400 点、工芸・民芸分野に属する作品では陶磁器等約 700 点、プロダクト・デザインに属する作品で近代椅子、照明器具、玩具等約 800 点、グラフィック・デザインに属する作品でポスター等約 20,000 点、またスペシャルコレクションとして大正モダニズムの旗手でありプロレタリア美術の中心的存在であった故柳瀬正夢の絵画、素描、挿絵、ポスターなど 1,400 点が遺族より寄贈され「柳瀬正夢コレクション」として位置付けられている。また日本画家の川崎鈴彦名誉教授より寄贈された川崎家伝来の絵巻物の模写作品約 640 点が「川崎コレクション」として収蔵されている。その他の美術作品として歴代の卒業制作優秀作品約 240 点を所蔵する。民俗資料コレクションとしては、陶磁器、布製品、藁製品、木製品、民間信仰用具、郷土玩具などが生活造形資料として収集されており、そのほとんどは厚意による寄贈の積み重ねにより形成されてきた。

このように本学の教育研究上必要とされる貴重図書コレクション、美術資料コレクション、民俗資料コレクションの異なるメディアは、美術・デザインの専門大学における教育研究を支える上で有機的に機能するように体系的整備が試みられている。またこれら 3 種類のコレクションは図書館・美術館・博物館の 3 つの機能を果たすべく美術資料図書館の柱となるコレクションとして今日に至っているもので、美術系専門大学としての建学理念に基づき、それらの資料群の構築、整備に努めているものである。

②資料の体系的整備と量的整備

資料の書誌情報については、和書は「日本目録規則 1987 年版 改訂版」、洋書は「英米目録規則 第 2 版」、分類は「日本十進分類法 新訂 9 版」(NDC) に準拠して作成している。特に洋書についても「日本十進分類法 新訂 9 版」により分類記号を付与しさらに日本語による主題件名も付与し利用者にとって資料検索の手助けとなるようデータ作成を

行っている。

当館の図書館システムの導入は平成9年2月に日本IBM社製品「ライブビジョン」によりスタートした。導入に先駆け平成8年度より図書資料の書誌所蔵情報のデータベース化を着手し、遡及入力事業を業者に委託し同年4月システム稼働時は開架・閉架併せた書誌データ件数50,000件を終え試験導入を開始した。システムの稼働にあたり学術情報センター（現 国立情報学研究所〈略称NII〉）と接続しデータをダウンロードし書誌情報処理を行っている。同時に利用者向けに学内に限定して所蔵資料の公開検索を実現した。

以降6年計画により全図書資料の遡及入力を行い、平成15年度に一般図書約200,000件の遡及データ入力が完了した。さらに平成15年度より5年計画によりこれまで整理を保留にしてきた国内の展覧会図録約35,000件のデータ入力に向けて業務委託により作業を進行中である。平成16年5月現在そのうち約10,000件のデータ入力が完了している。なお、中国書と漢籍については、システム導入当初は対応不可能な言語であったためにデータ作成が保留されていた。

美術資料図書館が所蔵するすべての資料を組織化するという観点から、これまで冊子体目録によって対応してきた視聴覚資料2,400点を、平成16年度よりNIIのデータを利用してデータベース化し、一般図書と同様に一元化した全資料の組織化を目指している。

*平成15年度における全データ件数約240,000件の内訳

- : 一般図書A ナンバー95,000冊
- : 一般図書LA ナンバー2,000冊
- : 展覧会図録洋書14,000件
- : 展覧会図録和書41,000件
- : 開架図書24,000冊
- : 金原・服部8,000冊（和綴本・卷子本2,000冊は冊子体目録でありDB化していない）
- : 旧NDC7版56,000冊

[点検・評価]

図書・雑誌の収集・受入れは、限られた予算と人員をふまえるならば成果をあげていると評価できる。図書・雑誌・視聴覚資料のそれぞれについて、美術大学という本学の特質に配慮した収集と受入れがなされていると判断できるからである。

とりわけ「特殊コレクション」とされている資料については、専門図書館としてふさわしい体系的な収集となるような努力がなされ、そのなかには日本・東洋美術史の専門図書群、内外の「絵本コレクション」、海外の歴史的な貴重雑誌群や、19世紀以降の内外の展覧会図録群などが図書館の個性を形成している。学術雑誌についても、本学図書館における美術・デザインの専門領域に特化した定期行物の蔵書の質は極めて高いものであり、企業PR誌のコレクションなどは美術大学の教育研究資料としても特にユニークである。今後ともその特徴や質を保持するよう努めなくてはならない。これら美術・デザイン系の分野に特化した収集方針は、大学図書館間の交流の促進等により、さらに推進され、効率的な収集がなされることが望まれる。

資料の購入にあたっては、特殊なもの以外は館内の選定会議によって決定されている。選定基準は明文化されていない。また、全学的な選定委員会等は設置されていない。

資料の組織化については、もともと和書・洋書ともにそれぞれの標準的な目録規則に準拠しており、妥当な方法だと評価できる。近年コンピュータの普及につれて課題となっていた電子システムによる資料の組織化については、他大学に遅れることなく計画的な導入が図られており地道な努力が評価できる。また同システムの稼動にあたって国立情報学研究所と接続するとともに、所蔵資料の学内に向けての公開検索を実現したことは以前にまして利用者の利便性を高めるという成果をあげている。

展覧会図録についてはこれまで一般図書にくらべて電子的な整理が遅れている。

なお、図書資料以外の多様な形態の美術資料コレクションを保有することも評価に値するが、図書資料とともに総合的・包括的にとらえる視点と資料のデータ整備、そして活用のための方策がまだ不十分である。これらの統合的・体系的な整備が求められる。

また、視聴覚資料については、本学では図書館とは別に「イメージ・ライブラリー」がその収集と利用の役割を担っているが、今日のデジタルメディアを伴う出版形態のさらなる展開を考慮すると、図書館との統合的な収集・利用方式が検討される必要がある。

[改善・改革方策]

図書・雑誌を中心とする資料の収集・購入については、さらに美術・デザイン系の専門分野に特化した独自のコレクション形成を推進するべく全学的な検討をすすめる。特に一般古書や貴重古書の選定と購入にあたっては、選定基準の明文化されたものがないので、少ない予算で最大限の効果を期待すべく、より客観的な視点の拡充をしなくてはならない。そのためには当該分野の教員からの助言が得やすいような何らかのかたちでの選定委員会や機関の発足が必要になるだろう。

これまで整理を保留してきた展覧会図録についても、本学の特色を如実にあらわす資料であるだけに、引き続き計画的な処理を行うものとする。

図書資料以外の多様な形態の美術資料コレクションと図書資料との総合的・包括的な利用促進のために、データベースの整備を行うものとする。活用の方策についても新施設の新設なども視野に入れて整備を行う。

A群 図書館施設の規模、機器・備品の整備状況とその適切性、有効性

[現状把握]

美術資料図書館は地上3階建てである。

1階に事務スペースが集中して設けられており、館長室、事務部長室、図書資料担当、美術資料担当の各事務室が配置され、その他にも展示室や作品庫などがある。

2階には参考資料閲覧室、開架雑誌閲覧室、視聴覚資料を利用できるスペース、書庫、雑誌庫、レファレンスカウンターがあり中2階に開架図書室およびサービスカウンターと展示室がある。

図書館および図書・電子媒体等

3階は資料共同利用室と特別閲覧室がそれぞれ1室ある。資料共同利用室はボードファックス2台を設置し貴重資料を利用した少人数の授業やグループ学習のために利用され、特別閲覧室は教員研究者専用の閲覧室として利用されている。両方の部屋ともノートPCが利用できる環境を整備している。

保存書庫は2層式になっており、1層部分では貴重書を含む一般資料を、2層部分では一般図書の一部、金原・服部文庫、国内外展覧会図録、絵本、逐次刊行物を保存管理している。

現在図書館本体の収蔵スペースは、既に限界を超えており、開架図書室のスペースにおいても同様に今後継続的な図書の増強は困難な状況になっている。

現在、雑誌等を含む全蔵書の8割強が閉架書庫に保存管理されており、書庫は既に満杯状態である。利用率の高い資料や最新の資料を優先して保存管理を行うためには一定のスペースの確保が必須であるため、蔵書の一部を外部業者に管理委託をしている。

具体的には平成14年度より大型本約1,800冊、15年度より新聞縮刷版約1,300冊余りの保存を外部の業者に委託し、利用者のリクエストがあり次第取り寄せて提供している。

視聴覚資料等の配置・保存についても同様にスペースの問題上、利用に有効な配架が不可能となっている。

また、貴重書・貴重雑誌・貴重古書の配架と保存は1階作品庫で行っている。ここでは一部の美術資料作品の保存も行っているが、空調設備を備えた保存書庫ではないため、特別に防虫・カビ対策や保存状態のチェックを入念に行っている。

美術資料図書館発足のコレクションである「金原・服部文庫」、展覧会図録、絵本コレクションは、いずれも閉架書庫2階の一角に別置している。雑誌は、開架雑誌室に閲覧用として最新のものの約250タイトルを配架し、バックナンバーは雑誌庫に保存管理している。

なお、退任教授や特定の個人から寄贈を受けた大量の図書資料を保存しているが、配架スペースがなく有効利用ができていない。

閉架書庫内の一般資料の配架は、日本十進分類法(NDC7版)による分類配架と、本学独自の受入順番号(Aナンバー)を併用している。後者は書庫の収納能力を超えた時点で、収納効率を優先して止むを得ず取り入れた配架方式であり、通常の利用者を想定した配架体系となっていない。

機器・備品の整備状況は以下の表(1)に示す通りである。

〈表1 資料室および開架図書室の機器・備品〉

	資料室	開架図書室
検索用端末	6台	4台
コピー機	3台	3台
スキャナー	1台	—
ビデオデッキ	1台	—
LDプレーヤー	1台	—

[点検・評価]

現在、全蔵書数の1割しか開架図書として配置されておらず、座席数も足りない。閉架書庫も物理的に満杯状態が数十年にわたって続いており、勉学熱心な学部学生にかなり不利な状況をきたしていることは明らかで、まずは学習機能を優先する開架図書の配架スペースの確保が急務である。開架の書架増設が見込めない現状で、各書架を最上段まで有効利用することや毎月100冊の最新資料を再整備するという努力が評価できるものの、図書館機能の全面的改善を果たすための抜本的な対策が求められる。また開架図書室は本学独自の請求記号を用いて分類配架を行っており、資料数の増加した現在、目的の資料に迅速に辿り着くためには改善が必要となっている。

閉架書庫についても同様で、継続的な図書の増強は困難な状況が続いており、利用者が書庫に入ることも困難な状態であるばかりでなく、たとえ書庫に入れても現在は収納効率を優先する受入順の配架を行っているため、関連する図書が分散しているほか、全集・叢書の類が一箇所にまとまって配架されていないため、書架をめぐり歩いて発見・出会いの楽しみを享受できる「ブラウジング」の機能が十分に達成されていない。さらに書庫内にコピー機やコンピュータが置かれていないため、資料の活用にも不便である。

[改善・改革方策]

現在の配架・保存状況を改善するために、蔵書の一部を外部業者によって管理委託することをさらに進める必要があるが、それも一時的な対策に過ぎない。

現状の建物が現在の蔵書数や学生数に対して狭小であるため、配架や保存が困難であるのみならず、図書館のすべての組織や機能に重大な影響を及ぼしていると言ってよい。開架・閉架にかかわらず書架の絶対量が不足しているという事情は長年の課題であるので、これらの解決にあたっては、早急に新図書館の建設を推進し、平成21年度竣工に向けて包括的な解決策が講じられなければならない。

一方、開架図書室における本学独自の配架方式は、近年中にすべてNDCに準拠した分類配架に変更することとする。

なお、閉架書庫の利用については、当面の対策として平成15年12月より卒業論文作成を控えた4年生に対して閉架書庫への入室利用を認める応急措置をとることとした。

A群 学生閲覧室の座席数、開館時間、図書館ネットワークの整備等、図書館利用者に対する利用上の配慮の状況とその有効性、適切性

[現状把握]

①学生閲覧室の座席数、開館時間

閲覧室の座席数は、開架図書室が86席、資料室（雑誌室を含む）が96席、資料共同利用室が収容人数20名程度で、特別閲覧室が収容人数10名程度であり、合計212席である。また書庫には利用者のための移動式の閲覧台（キャレル）が1階と2階それぞれ2卓ずつ設けられている。

開館時間は、平日は9時から20時まで、土曜日と授業のない期間は9時から17時まで、

通信教育課程の夏期スクーリング期間中は9時から19時までである。17時以降の夜間開館は学生アルバイトが対応している。館外貸出しサービスの規定は「武蔵野美術大学規約」の「武蔵野美術大学美術資料図書館利用細則」に準拠し以下の表(2)に示す。その他のサービスとして、貸出し中の資料に対する予約サービス、他大学図書館からの文献複写サービス・現物貸借サービス、資料相談などがある。なお卒業生および校友を対象とした利用サービスは「武蔵野美術大学美術資料図書館利用細則」第2条(5)(6)に定められたとおり利用することができる。

〈表2 利用者グループ別貸出冊数および貸出期間〉

利用者	貸出冊数と期間	
	閉架資料(冊数/期間)	開架資料(冊数/期間)
本学博士課程の学生	25点以内/30日以内	5点以内/14日以内
本学修士課程の学生	10点以内/30日以内	5点以内/14日以内
本学教職員(非常勤)	10点以内/30日以内	5点以内/14日以内
本学教職員(専任)	25点以内/30日以内	5点以内/14日以内
本学学部生	3点以内/7日以内	5点以内/14日以内

②教育・学習支援体制

教育研究上必要なコンテンツ・サービスやクリッピング・サービスについては一部の提供にとどまっている。ただし、オリジナルの貴重書そのものを授業に提供し活用される機会は年々増加の傾向にある。教員の依頼を受けて授業内容に即した貴重書を選択し、授業のサポートをしている。一方美術資料作品においては絵巻やポスター、椅子など、民俗資料においては民具や郷土玩具などを教育研究に供している。

またデジタル情報による教育支援については貴重書や美術作品など特別コレクションがより活用されるよう画像データベース化の充実に努めている。具体的には図書資料では日本の和装本を含む絵本コレクションをはじめ、エル・リシツキー・コレクション、万国博覧会資料、ケルムスコット・プレス・コレクションが画像データとして提供されている。一方、美術資料作品は絵画・近代椅子・ネフ玩具・陶磁器・ポスターの各コレクションが対象となっている。美術資料担当ではこれらの画像データベースを利用して学芸員実習の授業をサポートし、図書資料担当に関しては通信教育課程の「情報処理」の授業において、図書館システムがモデルとして活用されているが、一般授業での活用は必ずしも十分とはいえない。

さらに図書館員は、それぞれの専門性を活かし、貴重書を使用した授業については作品解説に協力し、また教員の担当する科目の一端を担い教育研究活動を支援している。

[点検・評価]

一般図書のデータ入力完了、展覧会カタログ等のデータベースの一元化、洋書に対する

日本語による主題件名の付与、開架図書の NDC に準拠した体系的な分類配架などを行ったことにより、利用者の資料検索の利便性は格段に向上した。そのことは年間貸出し冊数の増加に表れていることは評価できる。ただし、閲覧席は 212 席にとどまり、大学図書館として理想とされる在学生の 1 割（4000 名に対して 400 席）には及ばず、大学図書館改善要項に規定される「学習・教育研究のために十分な数」が設置されているとは言えない。また図書館機能の主要スペースにパソコンが利用できる情報環境が整っておらず、視聴覚資料の閲覧ができる環境も不十分である。また書庫内で検索システム利用および資料複写が可能であることが望ましい。これらはすべてスペース問題に起因し、現状では改善策を講じることが不可能である。

貴重書ほかを授業で活用できることが周知されつつあることからその機会が増えることは好ましいが、担当職員の負担は増大している。

[改善・改革方策]

閲覧席の増設、閲覧席におけるパソコン利用環境および視聴覚資料閲覧環境の整備を急ぐ必要がある。

図書資料、美術資料ともに一層の利用が望まれるところであり、教員への利用促進の方策が必要である。たとえば画像データベースは学芸員教育には利用されているものの一般授業での利用も可能である。ガイダンスの機会を定常的に設けることを検討すべきであろう。以上の方策を具体化するためには、図書館の人員構成を検討すべきである。

A群 図書館の地域への開放の状況

[現状把握]

本学の美術資料図書館は、図書館と美術館・博物館のふたつの機能を持つ独特の施設である。現在、図書資料の利用について、一般開放は行っていないが、要望のある場合は、その都度、利用者側の事情を判断し美術資料図書館利用細則第 2 条(7)「館長が特に許可した者」に該当する場合は対応している。

また、美術資料図書館の美術資料担当では年間約 10 本の展覧会を企画し、広く地域に開放している。一般の来館者の事情を考慮し、年 10 回程度の特別開館日を設け日曜日・祝日にも開館している。

[点検・評価]

図書の地域住民による一般利用については今後の課題である。美術資料展示の公開については、授業のある土曜日に加え、日曜日・祝日に特別開館日を設けて関係者のみならず地域住民に展覧会を公開していることは評価に値する。

[改善・改革方策]

図書の一般利用については、新図書館の施設整備を機会に、諸規則を改めて勘案して検

討することとする。

(学術情報へのアクセス)

B群 学術情報の処理・提供システムの整備状況、国内外の他大学との協力の状況

[現状把握]

①学術情報の処理・提供システムの整備状況

図書館が所蔵している資料は図書管理システム<LVZ>により集中管理している。LVZはIBMによる大学図書館向けパッケージシステムで、国際標準情報検索プロトコル(ISO規格)Z39.50に対応し、国内だけでなく海外のZサーバーも横断検索できる機能を有している。目録システムは国立情報学研究所(NII)の新NACSIS-CATシステムに完全準拠しており、NIIと本館のデータをシームレスに検索でき、NIIのデータは簡単にダウンロードが可能である。また多言語対応なので、中国語、ハングルなどの文字も入力・表示・検索することができる。

LVZの基本的な機能として、収書管理(図書・雑誌の受入・発注)、NIIとのインターネット接続(書誌データの登録やダウンロード)、目録管理(図書・雑誌の目録情報の更新や所蔵情報管理、蔵書点検)、OPAC(Web上での蔵書検索)、閲覧サービス(貸出・返却・延長処理、予約処理、督促処理など)がある。

書誌データについて、国立情報学研究所のNACSIS-CATやアメリカのOCLCなどの書誌ユーティリティとインターネット経由で接続し、データのダウンロードや登録を行っているが、本館独自の書誌項目を作成することもでき、美術資料特有の情報提供を行っている。

また、データ抽出機能により任意に情報を取り出し、蔵書・貸出状況・蔵書構成などの統計を出力することができ、利用者サービスの向上に役立てることが出来る。

OPACについては、インターネット上に書誌・所蔵・貸出状況を公開すると共に、搭載された全文検索エンジンにより、図書・雑誌・雑誌記事・カタログなどの目録情報を検索することができ、200,000冊超の資料から、利用者が必要としている情報を提供することができる。

図書館所蔵資料のうち視聴覚資料については、すぐにOPAC公開できる状態に登録を行っているが、図書館内に十分な設備が備わっていないこともあり現状ではOPAC非公開としている。ただし、視聴覚資料に特化し収集・整理・保存しているイメージ・ライブラリーにおいて所蔵する約1万タイトルの資料(DVD、VHS、LD、16mmフィルム、CD、CD-ROMなど)については、インターネット上でタイトルや人名、画像など多方面から検索でき、イメージ・ライブラリー内のブースにて視聴できる。

本学図書コレクションの特色を成す貴重書については、平成14年度に導入したIBMソフト「ノードミノ」のシステムをカスタマイズして使用し、画像のデジタルデータベース化を行っている。平成15年度に約3,000件の画像データについてデジタル化し、試験的に美術資料図書館ホームページ上で学内に限定して公開している。ただ、書誌データの精度に問題を残しているほか、閲覧機能の向上を図る必要があり、検索結果の画像一覧表示ができるようシステムの改良を計画している。

美術資料についても、タイトル・作者・年代などの情報と画像を、「ファイルメーカー」を使用してデータベースの構築を進めている。

②外部データベースの導入とサービス体制

外部データベースとしては、一般的・総合的なものと美術・デザイン関係に特化したものから本学における教育研究活動に欠かせないものを選んで導入している。

図書館内に限定してアクセス可能なデータベースとしては、国内最大の雑誌・論文情報データベースである「Magazine plus」、アメリカの OCLC が提供している総合データベース「First search」、朝日・毎日・読売・日経各新聞記事データベースを導入している。

また学内フリーアクセスのデータベースとしては、英国図書館が提供する幅広い分野の学術雑誌記事検索データベース「British library inside web」や、美術・デザイン関係では「ART bibliographies Modern (ABM)」と「Design and Applied Arts index (DAAI)」を導入して、専門領域をカバーしている。

③国内外の他大学との協力の状況

他大学との協力状況については一般的な図書館間の相互協力に加えて、東京多摩地区の近隣5大学（国際基督教大学・国立音楽大学・東京経済大学・津田塾大学・武蔵野美術大学）から成る多摩アカデミック・コンソーシアム（TAC）にも加盟し、協力関係を構築している。

TAC では次のような相互協力を行っている。

- ・ 5大学の所蔵する図書を共有資料とし、お互いに貸借することでそれぞれの図書館ではカバーできない分野の資料を利用し合う。
- ・ 各図書館が TAC 全体の図書館の一分館であるという考え方に立ち、通常他大学の図書館を利用する時に必要となる種々の手続きを経ずに、その大学の学生が利用するのと同じように利用できる。

その他にも、加盟する他大学で授業を履修し取得した単位が卒業単位として認められる単位互換制度をはじめとして、様々な協力関係のもと地域社会との交流も含めた新しい大学の可能性を広げていくことを目指し活動を行っている。

[点検・評価]

学術情報の処理・提供システムの整備は進行しているが、その上で問題点を個別に見ると、図書については、ほとんどの資料がデータベース化されているものの、展覧会図録についてはデータベース化が遅れている。

図書館内で各種オンラインデータベースが利用できるが、図書館のホームページからも利用できるような連携の必要性について検討が必要である。

外部の専門的なデータベースを学内フリーアクセスできる体制を整備していることは評価できるが、むしろ問題はその利用の低調なことである。

TAC 創設以前から、さらに遡ってインターネット普及以前から、学術情報センター編『学

図書館および図書・電子媒体等

『術雑誌総合目録』によって、各大学図書館における学術専門雑誌の所蔵状況は公開されていた。これに伴い、本学図書館は専門性の高い稀少な専門雑誌を数多く所蔵しているため、国公立大学図書館・専門研究機関を通しての、専門家からの和・洋の専門雑誌の複写依頼に数多く応じており、評価されている。

TAC の連携による相互利用については、本学においては他大学への貸し出し数に対して借り入れ数は低調であり、学生へのシステムの周知は未だ十分とはいえない。

専門雑誌資料は、復刻版ではなく古いオリジナルの版を多く所蔵しており、かつ雑誌自体の美術資料としての価値を優先させ、裁断を伴う製本・合本を極力控えている。こうした本学のコレクションに対するポリシーを尊重して、永続化させていく方策を考慮すべきである。

[改善・改革方策]

外部データベースについては、今後のより一層の利用促進に向けて定期的にガイダンスを行うなどの働きかけが求められる。

TAC 加盟の各大学図書館はその専門性に対応して所蔵資料の特化をすすめているため、より一層の相互利用の可能性を持っている。本学においては、学生へのシステムの周知を継続・強化し、利用者数の増加に努めることとする。また、本学蔵書の専門性に鑑み、本学特有の書誌項目を作成するとともに、美術資料特有の情報提供を継続して行うことも必要である。